巻　頭　言

2019 年の年末に、中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症が国内外に蔓延し、医療並びに経済にこれ程まで甚大な影響をきたすとは思いもしませんでした。現在も予想より早い第 2 波が押し寄せてきており、出口の見えない中、地域医療を守り、職員を守ることに集中する毎日です。

加古川中央市民病院は 2016 年 7 月開院以来、消化器センター、心臓血管センター、こどもセンター、周産母子センター、がん集学的治療センターの 5 大センターを中心に高度専門医療を実施し、各診療科での充実した診療とその総合力で救急医療に取り組むことで高度急性期・急性期医療を担う病院として、着実に業績を積んできました。新病院が開院した 2016 年度からは 5 年間の第 2 期中期計画に入り今年度は中期計画の最終年度を迎えます。

2018 年度には、放射線治療専門医の着任により放射線治療科を新設し放射線診断・ＩＶＲ科との 2 つの診療科としました。外科でのダ・ビンチによるロボット手術、心臓血管センターでのインペラなど新規医療技術の導入なども実施されています。年々増加する手術件数に対して 14 番目の手術室も増設することができました。新病院開院以来、がん診療の充実に取り組み今年度より国指定がん診療連携拠点病院の認可を受けました。また、ゲノム医療への取り組みとして、昨年度に遺伝子診療部開設準備室を立ち上げ今年 4 月に遺伝子診療部を開設致しました。そして 4 月からは DPC 特定病院群（II 群）として診療しています。

医療の質向上への取り組みの中では、昨年 12 月に医療被曝低減認定施設の認定を受け、今後も良質な画像を担保しつつ、医療被曝の低減に取り組みたいと考えています。

加古川市民病院機構学術誌第 9 号には、2018 年度、2019 年度の 2 年間に亘る病院の概要並びに職員の論文や学会発表などの研究業績が盛り込まれています。ご覧いただき忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。

最後に、本誌の取り纏めにご尽力頂いた編集委員や職員の方々に深謝申し上げます。

2020 年 8 月

加古川市民病院機構　理事長
加古川中央市民病院　院　長
大 西 祥 男